

黒木あるじと  
ひがしね百物語



## 第六夜

瓦版

まなびあ  
テラス

2023年3月31日発行

ひがしね**百物語**とは？

山形市在住の怪談作家・黒木あ  
るじ氏をナビゲーターに迎え、「ひがし  
ね百物語」と称し、怪談を切り口に、  
その地域にまつわる様々な伝承や歴史な  
どの物語を掘り起こしてゆくプロジェクト。  
ト。毎回少しずつテーマやアプローチを変え、  
東根を新たに読み解いてゆく。

ふしぎ  
ポストとは？

開催日約一か月前から百物語  
当日まで、館内に出現する怪談投稿専門  
ポスト。館内の図書館入口に設置され、来館  
者からの不思議な体験談の投稿を受け  
付ける。投稿された中から黒木氏が厳選し、  
当日に参加者に紹介する。紹介された  
方には特製ステッカーを進呈。主な材質は木  
材、ひょうたん。投函口が狭い。

ナビゲーター  
黒木あるじ



一九七六年青森県生まれ。二〇〇九年、『おまもり』で第7回ビークーン怪談大賞・佳作を受賞。『ささやき』で第1回『幽』怪談実話コンテストブナまし賞を受賞し、二〇一〇年に『震(ふるえ)』でデビュー。近著は『怪談四十九夜 合掌』、『山形怪談』など。山形市在住。

# 第一部

「つむぐ人」  
「滝口国也」



東根で長く民話の収集活動をしている滝口氏に、活動の経緯をうかがった。

※事前インタビューと当日の会の様子を組み合わせ、なるべく方言のまま表記しています。

黒木 当イベントで、最も参考  
にしているのが、地域史や地元  
に伝わる民話集。記録し、本と  
して残してくれた方々がいたお  
かげで、我々は今こうして怪し  
げな怪談イベントを開く事が出  
来る。『遠野物語』の柳田国男な  
どが有名だが、実はこの東根に  
もそのような活動を続けてこら  
れた方がいる。その方の著作、  
東根を含む北村山地方の怪しい  
民話や不思議な伝承をこれでも  
かと詰めこんだ伝説集を、四半

世紀前、僕は偶然手に取り夢中になって読んだ。それから時が流れ、この「ひがしね百物語」のナビゲーターとして、東根の民話収集家に取材をする機会があった。それがまさかの邂逅。なんと相手はかの有名な説集の著者、滝口国也氏だった。非礼を承知で言うなら、僕は氏のご存命だとは思っていない。それが驚嘆すべきことだった。それが過ぎた今もご活躍なみに九十才を過ぎた今もご活躍なさっている。これぞまさに東根

## 【滝口国也氏プロフィール】

昭和 4年(1929) 山形県北村山郡東郷村野川  
(現：東根市)生まれ  
昭和22年(1947) 山形県立村山農業高校卒業  
昭和25年(1950) 山形青年師範学校卒業  
師範学校卒業後は、中学校の教員として各地  
に赴任。担当教科は、理科と技術。



### ▲教員時代

## 【瀧口国也氏は、何をした人？】

- 東根や北村山地方の民話を収集し、多くの本を出版。主な著作は、『山の伝え』、『東根の昔話集 第一編／第二編』、『北村山地方の民話（三部作）』など。
- 昭和35年（1960）「東根山岳会」を発足。初代会長。
- 昭和47年（1972）「東根民話の会」を発足。現在も会長を務める。平成19年（2007）、「東根さくらんぼ民話館」を建てる。

うかがいたい。

滝口 戦時中は誰も登山などしなかつたが、登山道はすっかり荒れていた。仲間と草木を刈る整備を始めたところ、三十人程にメンバーが増えて、これが昭和三十五年に「東根山岳会」となった。山菜やキノコの時期には遭難者が多くて、警察に厄介になる前にか見つけて欲しいと山岳会を頼ってくる。遭難者の捜索の仕方はその時に学んだ。管轄は御所山系から関山トンネルのあたりで、一人も死者を出さない・諦めない、という気持ちでほとんど助けたな。でも助けらんねつけ人もいた。死人を背負うのは水を背負うのと同じ、冷たい！ 手足が広がったまま硬まっているから、後ろから支えてもらいながらなんとか下まで運ぶ。大変な事ではあったが、多くの人を助けた事は本当に良かったと思う。

●数々の本の出版●

黒木 山岳会の活動でまた山とのつながりが出来たわけですね。整備や搜索以外にも山に行く理由があったとか。

滝口 日曜日ごとに御所山のあたりさ行つて、古老などに山の伝説を聞いて回るようになった。子どもの頃も山で人夫のじいちゃん達から聞いた事があつた。聞いた話を残しておかねば、たちまち消えてなくなると思つて、山岳会のメンバーにも協力して

伝え』という本にまとめて出版した。黒伏山の洞窟の中に金の杖を持って立っているという道知法印様の話とかな。

黒木 そういう話に興味がない人は聞いても忘れてしまう。なぜ先生は興味を持って本にまでしようと思ったのか？

コウモリがだあゝっといんのよ！なるほどな、これはおもしゃい（面白い）な、残しておがんねなと思つたんだ。

**黒木** 本を出版して、周りの反応はどうでしたか？

三

滝口 あ頃、山の伝説を集めた本なんて出した人はいなかった。非売品で千部作って、欲しい人さ配ったら、一年足らずで無くなった。この本は東根側の御所山の話。次の年には続編として尾花沢市側に残る御所山の話をもとめて本にした。尾花沢

には順徳上皇にまつわる話や地名がいっぱいあるっていうから、ほだなおかしいな〜と思って調べに行った。

**黒木** よくこんなにたくさん調

べられましたね。

滝口 調べるのはたいしたことでない。まず अच्छ अच्छ 聞いて回って、よく顔覚えられでな。

黒木 向こうからしたら、変わつ

た奴来たなあゝつて？  
滝口 んだべな（笑）。ほだな調

べるのいねつけがらな。

黒木 地元の人なら何となく知っていても、今と違って集落一つ離れれば伝わっていない話

もある。みんな非常に興味を抱いたから、本がそれだけ評判になったのでしよう。この本には明治時代の体験談も載っている。江戸時代までの民間信仰を迷信と否定し、近代化していった時代の中で、それでも彼らが見聞きし、信じて語った伝説を、先

近代化以降に語られた伝説をこ  
うして読むことが出来るという  
のは、我々と地続きの歴史のバ  
トンを受け取っているという感

じがします。この本以降もたくさん本を出されていますね。

滝口 山だけでなく、里にもおもしろい話がある。これも残し



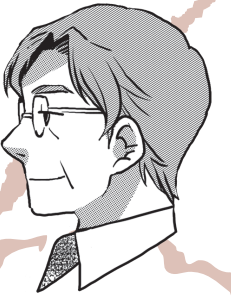




第二部

師弟

クロストーク



ゲストに東北文教大学 特任教授の  
菊地和博氏を迎え、黒木氏との思い出や  
「シシ踊り」について語っていただいた。

黒木 僕が山形や東北の不思議な話を収集するようになった原点の一つが菊地和博先生との出会い、かもしれない。かつて東北芸術工科大学に東北文化研究センターという組織があり、赤坂憲雄先生を筆頭に、森繁哉さんや内藤正敏さんなど、民俗学の雄と言われた方達が活躍されていた。僕は当時、専属のビデオカメラマンとして在籍していた、助教教授だった菊地先生と知り合ったわけです。先生は、「look for 伝承文化」という団体を作って東根市内の民俗芸能の発表会を主催しているんですが、飄々とね、いつの間にか人を取り込んで自分の活動に参加させるのが得意で、僕は気が付くと「look for」のシナリオ制作を八年くらいやってた。先生のお手伝いを通して地域の伝承文化に深く触れていったわけです。先生がいなければ、僕は怪談や伝承など、地域にこれほどの宝が眠っていることには気付かず、山形を離れ東京に行っていたかもしれない。色んな人に会えるし、怪談のイベントだって多いですから。ところが先生は、地方にいても研究や掘り下げが出来る事を教えてくれた。長い付き合いですが、今日は改めて、菊地先生に色々とうかがってみました。お願いします。

黒木 先生が、民俗学や民俗芸能に興味を持ったきっかけはなんでしょうか？

菊地 「シシ踊り」という芸能です。名前だけ聞くと、お正月に見かける「獅子舞」と似ていますが、違うものです。ほぼ東日本だけの芸能で、東根にもあります。複数人の踊り手の一人一人が、目の吊り上がった怖い表情のカシラを被って踊る。なぜあんな怖いものを被るのか、あれ、なんなのかなあ、と。

黒木 最初は純粋な興味だったと。なんだこれ？って。菊地 ええ、全くド素人の興味本位の。で、何かの動物みたいなだなという感じ。三十年くらい前です。それまで芸能にはあまり興味がなかった。私は山形県立博物館に勤めていて、こけしや竹細工、藁細工といった展示物を担当していたのですが、芸能っていろいろは動くので、展示にあまり向かないなという(笑)。動かないものが好きだったのが、あれは何だろうかと興味関心が湧いてきて。シシ踊りはお盆に行われる事が多いので、自分の家のご先祖様をほつたらかして、県内各地を回るようになり、さらに東北全域から関東地方まで回ることになった。

黒木 ひどい話なんです！ちょっと付き合ってください！

菊地 よろしくお願ひします。黒木 先生が、民俗学や民俗芸能に興味を持ったきっかけはなんでしょうか？

江刺、栃木、群馬までを二泊三日ですからね。シシ踊りの撮影弾丸ツアーを野郎二人で敢行したわけです。お盆なのに、僕、実家に帰れないんですよ？

でもおかげで、東北地方ではお盆に墓前でシシ踊りをする、という地区がこれほど多いと知る事ができた。とても興味深かったですね。

菊地 シシ踊りは日本固有の芸能で、関東地方のシシ踊りは雨乞いや悪魔払いのために踊ります。霊魂を供養するために踊る、というのは東北地方のシシ踊りの際立った特徴の一つですね。

黒木 これは百物語というイベントですから、ぜひそのあたりを語っていただきたいのですが、霊魂を供養するため、というのはどういう事でしょうか？

菊地 まずなぜ怖い動物のようなカシラをかぶっているのか。あれは「鹿」や「猪」を表していると思います。「シシ踊り」は「鹿踊り」と表記して、カシラに鹿の角をつけている場合が多い。「シシ」というのは、古い言葉で食肉、特に狩猟の対象となる鹿と猪を指します。縄文時代から人々にとって最も身近な狩猟動物でした。そして時には作物を荒らす害獣にもなる。狩猟や害獣駆除で命を奪われた動物の供養のためにシシ踊りは始まったのではないかと。つまり「怨霊供養」なんです。生者の一番の責務は、亡くなった人を供養する事です。特に恨みや未練を残して亡くなった場合は祟らないようにねんごろに供養する。それは動物



【菊地和博氏プロフィール】

東北文教大学人間科学部人間関係学科 特任教授。専攻は日本民俗学・民俗芸能論。  
【社会活動等】東根市文化財保護審議会委員長、NPO クリエイトひがしね理事長、Look for 伝承文化実行委員会委員長 など。  
【主な著作】『東北の民俗芸能と祭礼行事』、『民俗行事と庶民信仰』、『シシ踊り－鎮魂供養の民俗－』など。

菊地 無いですね。黒木 正直だな(笑)。菊地 あんまりそういうのは無いんですよ。黒木 いや、いいんですよ、それで。地方ニュースで、郷土芸能の奉納の様子が流れていますが、何気なく見ているそれらの祭礼の裏には、我々の先祖が死者の影に怯えていた、という歴史があった。現代でさえ何か不幸が起きるとその原因を死者に求めることがある。我々の死生観にはそういう死者への畏怖の感覚が受け継がれている。

菊地 「安らかに眠りください」とよく言いますが、安らかに眠れない霊がたくさんいる。黒木 もちろん故人の安寧を願って言うわけですが、一方死者というのは油断すると荒ぶりますから。恨んだり祟ったりしないでくれ、とも願う。もう一回だけ聞きますね。怖い体験は無いんですか？

菊地 無いですね。小さい時は外のトイレに行くのが怖かったですけども。黒木 いいんです。面白いじゃないですか。伝承されてきたものに接し、片や民俗学に没入する方もいれば、滝口先生のように記録して語り部となる方もいて、僕みたいに胡散臭く怪談で怖がらせる者もいる。色んなアプローチがあるけど、実は似ていると思うんです。我々の住むこの土地で、過去に先祖が繋がっていたかもしれない無念の死を遂げ忘れ去られた人達。名もなき死者でも誰かの記憶や記録に残っていたい、それが生きた証であるとして生者に訴える無縁仏達。彼らがかすかに残したものを集めて探って気持ち悪くさせる作業を、それぞれ違う形でしているだけなんだと。

菊地 あ、思い出しました、怖い体験がある。いや、無いんですよ。何故無いのかは、私が

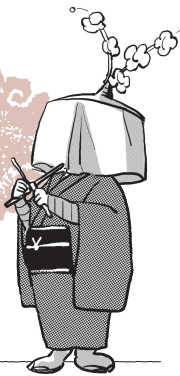
信心深いからかもしれません。神仏にすごく敬虔に手厚くお参りするので、守ってもらっているというか。黒木 ああ、それは面白いな。幽霊なんて信じていないから体験しないのではない。普段から神仏を敬っているから怖い目に合わないのだと自分の中で結論づけたわけですね。御本人は気付いてないようですが、皆さん、この面白さがわかりますよね。

東北、山形、東根を根にする僕らの中にも、この矛盾と豊かさと面白さが流れている。それを感じていただけると、大先輩のお二人をお招きして、皆さんにご紹介した甲斐があったというものです。

※注8 ヤマセ 北日本の太平洋側で春～夏に吹く冷たい風。農作物に冷害をもたらす凶作風。餓死風として恐れられた。

百物語に寄せて

黒木あるじコラム  
《特別編》菊地和博氏によせて



■静かなるまなざしの人  
逝るこ十五、六年前のお盆。私は菊地先生の車に同乗し、東北・北関東一円を駆け巡っていました。墓前や庭先で披露されるシシ踊りを調査するため、カメラマンとして同行していたのです。旅程は非常にシビアなものでした。なにせシシ踊りはお盆の二、三日間しかおこなわれないのです。真夜中に東根を出発し、第一の取材先・青森県八戸市に到着したのは夜明け前。そこからいくつも調査を進め、岩手、栃木とフルスピードで南下していく……：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：～

抱いたのかもしれない。いわば黒木あるじという書き手にとって、菊地和博は大恩人なわけですが、そのような謝辞を述べたところで菊地先生はいつもの飄々とした口ぶりを崩さず「ああ、そうなんだ、ふうん」と答えることでした。それで良いのです。それでこそ菊地和博です。今後ますますお元気で研究に邁進し、不肖の弟子たる私にいつその刺激を与えてくれることを願ってやみません。いつかまた一緒にシシ踊りを取材しに参りましょう。



第三部

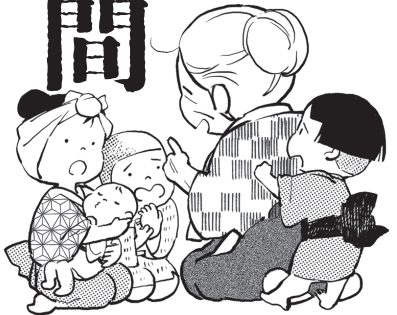
寄せられた投稿の一部をご紹介します。

# ふしぎポストの

## 投稿の紹介

### 怪異譚蒐集集の時間

ナンバー「タイトル」名前  
／年齢／性別  
寄せられた投稿は、掲載に  
際して編集しております。



1. 「繋がらない電話」羽舟  
／67／男性▼父が闘病で入院  
中、「自分が死んでも親戚の  
A家には知らせるな。知らせ  
るなら、死後処理が終わって  
自宅に帰ってからだ」と言う。  
危篤状態になり、親戚中に電  
話を入れたが、A家だけは誰  
も出ない。息を引き取った時  
も、遺体ケアの時も、A家に  
連絡した不通。ようやく繋が  
ったのは、父の身体が家に  
帰ってからだった。

#### 怪異譚蒐集集の時間 （参加者による怪談披露）

1. 女性／尾花沢市の徳良湖  
に行った時、長女が「天狗が  
見える、飛んでいる」と言い  
出した。自宅近くの沼沢沼に  
も天狗がいるらしく、イケメ  
ンなのはどっちかと聞くと、  
沼沢沼の天狗の方だと言う。

2. 女性／十八年くらい前、  
南陽市での話。近所の文房具  
屋に小学生の妹と二人で出か  
けた帰り道、夕焼け空の、スー  
パーの看板あたりに、円柱  
形のビルのような形状のもの  
が浮かんでいた。たぐさんの  
窓から明かりが漏れていて、  
斜めに回転しながらも定位置  
に留まっている。怖くて一目

3. 女性／長野市伊佐沢出身  
の祖母から聞いた話。ある晩、  
住職である兄が、他所での法  
要のため帰りがすっかり遅く  
なった。集落へは真っ暗な一  
本道を通らなければならな  
い。その夜は月が出ていたが、  
不思議なことには月が二つ浮  
かっていると。何度見ても二つ。  
きつと、キツネかタヌキに化  
かされたのだろうという事  
だ。

散に逃げ帰った。家に着くな  
り祖母と母に絵に描いて説明  
するも、見間違いないかとい  
か怪訝な顔。遅れて帰ってきた  
妹も目撃して、怖かったのにお  
姉ちゃんに置いていかれたと  
怒っていた。今でもお互いに  
この出来事を覚えて

いる。（※編集者注 第一夜  
の時も、寒河江市で空中都市  
を目撃したという投稿が寄せ  
られた。第一夜互版参照。）

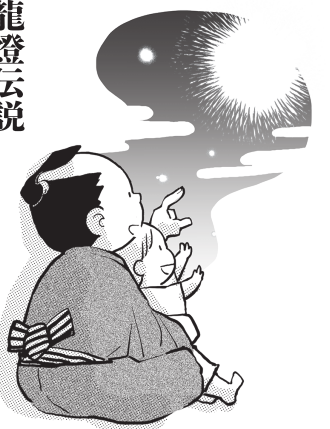
「龍燈」は龍神が寺社に献じ  
る神聖な火とされ、全国各地  
に様々な伝承がある。多くは  
地域ごとの特定の夜に龍神の

口国也氏の『山の伝え』  
には、「黒伏山龍燈」の  
伝説が収められている。  
明治の初め頃、田畑某という  
法印が黒伏山で修験中に龍燈  
を見つけ、参詣者に拝ませて  
いた。龍燈とは、年に三回、  
一月十五日、五月十五日、九  
月十五日の丑三つ時（実際は  
十六日の午前三時頃）に、黒  
伏地蔵権現東上方に上ると  
いう不思議な灯火の事で、一  
時間余りあたりを照らすとい  
う。明治三十二年頃の九月十  
五日、田畑法印と共に、東  
根衆十数名が龍燈を拝もうと  
精進齋してその時を待って  
いた。深夜、交代で見張って  
いた一人が龍燈が昇ったのを  
目撃したが、すぐに消えてし  
まった。参拝者の中に生卵を  
食べた不浄の者がおり、神の  
怒りに触れたのだと云われ、  
これを最後に龍燈を拝む事は  
叶わなくなったという。

「龍燈」は龍神が寺社に献じ  
る神聖な火とされ、全国各地  
に様々な伝承がある。多くは  
地域ごとの特定の夜に龍神の

# 怪のスポットを 訪ねて

## 《番外編》黒伏山龍燈伝説



太田氏が、不思議な月の写真  
の撮影に成功（図1）、それを  
見た滝口氏は「これが伝説の  
龍燈なのではないか？」と  
思ったという。以来、時期が  
来ると、撮影場所の東根某所  
に会員の皆が集まっていたと  
の事。しかし残念ながら未だ  
龍燈を拝む事は叶わず、会の  
悲願だという。

滝口氏いわく、「龍燈の正体  
が月かどうかは分からない。  
龍燈を見た事がないから。も  
し月ならば、十三夜塔や十五  
夜塔といった石碑が各地に  
残っているのは、お月様を一  
番綺麗に拝める所の目印では  
ないだろうか」。

龍燈に関して、東根民話の会  
の皆さんは非常に強い関心を  
寄せており、取材中にも何度  
もこの話題が上がった。なん  
でも、高崎地区に住む太田富  
太郎氏が、不思議な月の写真  
の撮影に成功（図1）、それを  
見た滝口氏は「これが伝説の  
龍燈なのではないか？」と  
思ったという。以来、時期が  
来ると、撮影場所の東根某所  
に会員の皆が集まっていたと  
の事。しかし残念ながら未だ  
龍燈を拝む事は叶わず、会の  
悲願だという。

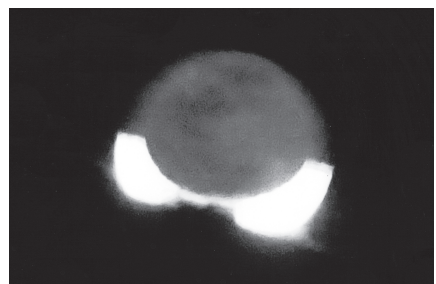


図1 《二十六夜月》撮影：太田富太郎  
平成30年11月3日（旧暦9月26日）

特定の月齢の夜に月待講（つ  
きまちこう）の仲間が集まり、  
飲食を共にしながら月の出を  
待ち、月を拝みながら経を唱  
えて悪霊を追い払うという  
「月待信仰」が、江戸時代、  
全国的に大流行した。月待講  
のメンバーが記念に建てたの  
が「月待塔」で、月齢を信仰  
する石碑が各地に残されてい  
る。毎月集まる地域もあれば、

一月、五月、九月、十一月な  
どに行う地域もあるという。  
龍燈と月待信仰は意味合いが  
違うものかもしれないが、皆  
で集まり決まった日に空に上  
がる光を待つ、という点は確  
かに似ている。先ほどの不  
思議な月を撮影した太田氏に  
よると、この晩は旧暦の九月  
二十六日で、月有明月（二十  
六夜月）だったという。



第六夜でプレゼントした  
缶バッジのデザイン

「黒木あるじとひがしね百物語」  
では、皆様が体験した怪談を随  
時募集しています。ご自身で体  
験した不思議な話や、ご家族、  
お友達との体験談などをお寄せ下  
さい。ふしぎポスト、電子メール、  
または直接まなびあテラス総合  
カウンターまでお寄せください。  
百物語当日に黒木氏により採用・  
発表された方には、黒木あるじ  
特製除霊札とひがしね百物語オ  
リジナル缶バッジを差し上げま  
す（当日参加された方のみ）。

「黒木あるじとひがしね百物語」  
では、皆様が体験した怪談を随  
時募集しています。ご自身で体  
験した不思議な話や、ご家族、  
お友達との体験談などをお寄せ下  
さい。ふしぎポスト、電子メール、  
または直接まなびあテラス総合  
カウンターまでお寄せください。  
百物語当日に黒木氏により採用・  
発表された方には、黒木あるじ  
特製除霊札とひがしね百物語オ  
リジナル缶バッジを差し上げま  
す（当日参加された方のみ）。

投稿大募集

## 編集後記

今回は趣向を変えて、初めてゲストをお  
迎えしての開催となりました。滝口国也  
氏と菊地和博氏、お二人の功績を広く紹  
介したいという黒木氏のたつての希望で  
す。実際にお会いしてみると、お二人に  
は共通点がありました。仕事に情熱を持  
ち、全力で楽しみながら人の輪を広げ、  
多面的な活動で地域に貢献されてきた点  
です。滝口氏は快活でちょっぴり照れ屋、  
菊地氏は柔らかく飄々とした雰囲気、  
決して偉ぶったところがないところも似  
ていると感じました。それぞれのファン  
だという方が何人も参加されていたのも  
頷けます。お二人の著作は、東根市図書  
館にも多数所蔵されています。ぜひこの  
機会にお手に取ってみてください。



まなびあ  
テラス  
第6号 2023年3月31日発行  
発行：東根市公益文化施設まなびあテラス  
〒999-3730  
山形県東根市中央南1丁目7-3  
TEL：0237-53-0223（代表）  
FAX：0237-42-1296  
HP：https://www.manabiaterrace.jp  
E-mail：info@manabiaterrace.jp  
編集/DTP：まなびあテラス市民活動支援  
センタースタッフ（天野・高橋）  
執筆協力：黒木あるじ